

斎藤浩文

このワークショップの目的の一つは、提題者それぞれの現状報告を手がかりに、フロアの方々をも交えて行われる情報交換にあるのだらうと考えます。そこで、ここではまず、私自身が担当しているコースおよび担当授業科目の具体的な内容を含めた現状の紹介をさせていただくことにします。それが、他の提題者ないしはフロアの方々のおかれている状況と、はたしてどの程度共通点を持つものであるのか（どの程度有意義な情報交換が可能なのか）という点に関しては、いささか心もとないところではあるのですが、ともあれ、なるべく、共通点・相違点がわかりやすくなるような形でご紹介できれば、と思っています。

私は現在、滋賀大学の教育学部情報教育課程の文化情報コースで教えています。情報教育課程は、教育学部ではありますが、学校教員の養成を目的としないいわゆる「ゼロ免」の課程で、文系理系双方のさまざまな専門分野の専任教官 10 名が、「情報教育」をキーワードにしたカリキュラムのもと、1 学年 70 名の学生を受け持っています。課程は理系のシステム情報コースと文系の文化情報コースにわかれており、文化情報コースは、認知科学系 3 名、人文社会系 2 名の教官で 1 学年 35 名の学生を担当しています。

コースの特徴について語るとき、学生の側のニーズを考慮に入れるという観点から考えると、大学のホームページに載っているようなコースのオフィシャルな紹介よりも、入学してくる学生がコースに対して持っているイメージというのが、より重要だと思われるのですが、それは、おそらく、「コンピュータ利用技術を身につけられる、そして、それに加えてちょっと文化、あるいは教育についても学べるコース」といった感じになるでしょうか。

当然のことながら、このコースといわゆる「文学部哲学科」との間には非常に大きな隔たりがあります。「哲学」という語は、コース名にも、コースの紹介にも、授業科目名にもまったく現れません。このことは、「哲学教育」ないしは、「哲学」をベースにした教育を行おうとしたとき、いささかの障碍となりえます。そもそも、文化情報コースに入学してきた学生は、大学で哲学を教えられるなどと夢にも思っていない。そのような構えの相手を、どうやって哲学の話題や議論に引き込めばよいのでしょうか。

このコースがたとえば「文化学科」とか「教養学科」のようなコースであると言えるなら問題ないのかもしれませんが。たしかに、もしそうであれば、「文化」なるもののさまざまな分野の一つとして「哲学」を教える、ということは、すんなり受け入れられそうです。しかし、文化情報コースの場合、そういうわけにはいかない事情があります。

問題の一端は、「情報（教育）」というキーワードにあると思われます。多くの学生にとって、ごく一般的なコンピュータ利用の技術を学ぶということが、入学目的のかなり重要な一部になっています。カリキュラムも実際それにある程度まで応えるものとなっていて、Word や Excel の演習、Visual Basic を用いたプログラミングの基礎、データベースの実習

など、おそらく一般の大学で行われているであろう文科系向けのコンピュータリテラシ演習よりはいくぶん多めの内容が、1、2年次において必修や必修に準ずる形で用意されています。それらの演習科目も、コースの専任教官が担当しますので、多い教官の場合は、授業のうち半分近くがコンピュータの演習だったりします。そもそも情報系コースの教官というレッテルだけでも学生には、何らかのコンピュータの専門家(!)と思われるかもしれません。まあ無理もありません。

なお、学生の中には、高校教科として最近新設された「情報科」の免許を取得しようとするものもいます。さらに、他の免許もあわせて取得し、中高の教員を目指すものもわずかながらいます。しかし大多数は、一般企業等への就職を志望しています。

したがって、文化情報コースの大半の学生がこのワークショップのタイトルにある「哲学者にならない人」以外のなにものでもない、ということは確かです。そんな彼らに対して、私が「哲学教育」ないしは「哲学」をベースとした教育を行っていることになっているかどうか 以下では、現在担当している授業科目を、哲学との関連を(いささか強引に、かもしれませんが)つけながら大まかに整理しつつ、具体的に紹介させていただきたいと思います。

1. 「論理学」的なもの

文化情報コースの1または2年次の必修として、各専任教官が1コマずつ、自らの専門分野の入門的講義を行う科目があります。私の場合、「情報文化基礎論」という科目名で、1年次の秋学期に開いています。当初、このコマでは、非形式的な論証分析からはじめて、論理記号を導入し、形式化の練習をした後、タブローを扱う、といった、オーソドックスな論理学の入門講義を行うつもりでしたが、途中で学生の反応を見て、むしろ、非形式論理に集中して、トレーニング形式にした方がよいのでは、と思い直しました。論証分析や評価に関して、宿題を課して添削をすることを通して、一定の効果があがっていると考えています。

記号論理は、文化情報コース関連の科目で扱うことはあきらめ、全学対象の教養科目「論理の世界」へ移すことにしました。こちらは、数学科教育専攻の学生や経済学部の学生なども受講しており、反応も多様です。自然演繹体系を利用し、自然言語との対応や意味の理論との関連などにも言及しつつ進めるのですが、なにぶん半期1コマですから、述語論理まですべてカバーするのは難しいので、命題論理に重点をおくことにしています。

2. 「哲学」的なもの

「情報文化基礎論」の後半では、いわゆる「哲学概論」的な話をしています。いくつかのテーマについて問題を提示し、たとえば独我論がらみの話や、人格の同一性に関するSF的な思考実験を導入にして、自ら考えることへと誘う、という具合です。毎回コメントを書かせて、次の時間にそれに対する応答から始める、という形式で進めます。

2年次春学期の課程必修である「情報社会と情報倫理」という科目では、具体的な情報倫理の話は後半担当の法学の教官に委ねてしまって、私は、情報社会についての議論の中でしばしば問題になる諸概念（たとえば、ヴァーチャル・リアリティなど）について検討する、という形で講義をしています。「情報社会に関連する」という制約はあるにせよ、これも哲学的問題に対する概念分析的なアプローチの一種と言えるのではないかと思っています。

今年度春学期に初めて開いた講義が、「情報表現論」という、コースの選択科目です。哲学的論理学のトピックを扱おうと決め、結果的に、必然性、可能性の概念について論ずることになりました。この「情報表現論」の前半は、人工知能論が専門の教官が担当しており、内容は基本的に互いに独立しているのですが、後半の初回に「表現」という概念を取り上げて分析することで、前半と後半のささやかな橋渡しを試みました。

3. 「情報教育」について

担当科目のうち「情報社会と情報倫理」「情報システム・データベース実習」の2つが、高校教科「情報」の免許認定のための科目となっています。このほかにコンピュータ演習として、2年次対象の「文化・社会情報演習」という科目があります。

実習や演習はいずれも文科系の学習や研究にとって有効な、いわばいくぶん高度なコンピュータリテラシーを習得することがテーマとなります。たとえば、データベース、フォトレタッチ、OCR、とさまざまなアプリケーションを使いこなすことが目標になりますが、それらをただ単に操作的に使いこなせるだけでなく、操作対象を自覚しつつ（たとえば、どのファイルをどのような仕方で操作しているのかを把握しつつ）使えるようになることが目指されます。また、HTMLや、テキスト処理のために必要な正規表現の習得という内容もありますが、これらは論理的なテーマと言ってよいかもしれません。

シラバスへのリンクなどを次の場所に置いてあります。

<http://www.sue.shiga-u.ac.jp/~saito/PSSJ/index.html>